

小説吉田学校

戸川猪佐武著

著者略歴

一九三三年（大正12年）

一九四二年（昭和22年）

一九六二年（昭和36年）

主な著書

神奈川県生まれ
早稲田大学政経学部卒、読売新聞入社、政治部記者、以来首相官邸、政党、外務省担当、この間東南アジア、モスクワ特派員
読売新聞退社、政治評論家となる
「昭和現代史」（光文社）「日本の首相」（鶴書房）「昭和外交史」（雷華社）「三年後の日本を見る」（日本文芸社）など

定価 四八〇円

昭和46年10月30日 二版発行

著者 戸川 猪佐武

発行者 倉林 公夫

発行所 株式会社 流動

東京都港区芝愛宕町一―三

（第九森ビル）

電話 〇三―四三三―七四六

平一〇五

振替 東京一〇七五三四

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日本製本株式会社

△検印省略▽

乱丁落丁の場合はお取替えいたします

小説吉田学校

戸川猪佐武著



小說吉田學校／目次

奇怪な指令——山崎首班事件——7

ある抵抗——田中角栄の登場——31

組閣は揺れる——佐藤栄作の起用——46

闘いの時間——総司令部との抗争——74

吉田学校誕生——池田勇人の登板——84

光と葉巻の寓話——自由党の大勝——103

独立への胎動——吉田のひそかな決意——131

ワシントンへの密使——池田勇人の渡米——149

火を噴く三十八度線——吉田・ダレスの勝負——177

オペラ・ハウス——対日平和会議ひらく——190

対決の日々——起ちあがる三木武吉——210

対話と術数のあいだ——三木、吉田に迫る——239

失言の波紋——バカヤロ——解散——263

斜陽のおとずれ——吉田茂政界を去る——285

末裔の群——大野伴陸の死——311

暑い夏の闘い——池田・佐藤の決戦——340

装幀 上西康介
さしえ 鶴田 幹

奇怪な指令

——山崎首班事件——

1

そのアメリカ人の英語は、さほど難解ではなかったはずである。それでいて須永のひたいは、冷え冷えとした汗がこまかく吹き出していた。

——どこかの個所を、聞きちがえたのではあるまいか？　せめてポイントの部分だけでいい、もう一度くりかえしてもらえたら……。

ひそかに胸のなかで、「Beg your pardon」とつぶやきながら、須永はアメリカ人の顔を凝視した。

そのアメリカ人——GHQ民政局次長ケージスの表情は、冷然として塑像のように動かなかった。通訳にあたっている須永はもちろん、ケージスが呼びつけた自由党副幹事長中井川隆一郎をも見下すような驕慢が、そのうちがわに見すかされた。

ケージスの言葉のひとつひとは、占領下におかれてゐる日本の政官界にとって、ジョーカーに似た權威をもっている。聞き手がえても聞き洩らしてもならないのだ。

G H Q 関係の通訳には、衆議院事務局渉外課員として、だいぶ慣れてきた須永も、いまの場合をはじめから緊張していた。相手がいづもの下僚ではなく、ホイットニイ民政局長をしのぐ実力者ケージスだからである。過度の緊張が、聞きちがいをおこさせたのであろうかと、須永は考えた。

事実は、そうではなかった。ケージスの肉の薄い唇から吐き出された言葉が、政治上の常識を超えていたのだ。予期しなかった意外な内容だったので、須永は、自分の耳を疑ったのである。おそらく彼のおもてに漂っている不安の色を、ケージスは認めたのであろう。須永に念を押してきた。

「私のいったことが、理解できたのか？」

「は、はい」という返事が、反射的に、須永の口をついて出た。

「では、復誦を試してみたまえ。誤解があつてはならない」

そのいいかたは、突き放すような冷たさをおびていた。

須永は、ひるみがちな気持に鞭うって、ケージスの言葉をくりかえした。

「……次期首班を、野党第一党の自由党が占めることは憲政の常道として認める。しかし、総裁の吉田茂は、超保守的で、首相としては好ましい人物ではない。幹事長の山崎猛を首相とするこ

とが望ましい。この山崎内閣は、諸般の情勢からして、自由党の単独内閣ではなく、共産党を除く、各党の挙国一致連立内閣であることを期待する……」

そう復誦しながら、年若い須永は、

——このケージスの発言は、つぎの総理大臣と、その政権のありかたを決定する重大なものなのだ。それに彼は、常識では考えられないような、総理候補の更迭を求めている。いよいよ重大なのだ……。

唇の震えを抑えがたかった。そのあいだ副幹事長の中井川は、地方議員出身にありがちな、いかにも教養のない型の代議士らしく、ケージスの言葉を理解できないまま、意味のない追従めいた笑いを浮かべていた。

須永の復誦がおわると、ケージスは冷やかな口調でこういった。

「……まちがいはない。そのとおりだ。ミスター中井川に聞かせてやりましたえ」

ケージスは、「返事を訊け」とはいわなかった。「聞かせてやりましたまえ」といった。自分の言葉は絶対的な指令で、反対は許さないと意識が露骨にあらわれていた。

須永は、正確を期するために、ひとつひとつを嚙んで吐き出すように通訳して、中井川に聞かせた。

中井川は、鼻下にたくわえたひげから、太い黒ぶちの眼鏡へと手を動かした。肚のなかを読ませないように、表情の変化を踏晦するいつもの手なのだ。それを須永は、日ごろの接触を通じて

よく知っている。

——中井川は、ケージスのこの予想外で重大な発言を、どう受けとめるのか？ ケージスに向けて、反発を示すだろうか。その前に、その発言が絶対的な指令なのか、または示唆なのか、あるいは希望意見なのか、そのあたりについて聞いたさだろうか？

生唾をのみながら、須永は中井川の反応を待った。待ついとまもないくらい早く、中井川の口から、彼がわずかしら知らないはずの英語のひとつが飛び出した。

「イ、エ、ス」そういつて彼は、しかつめらしい表情で、おおきくうなずいてみせた。

総司令部GHQは、旧第一生命ビルにあった。その建物は、柳並木をしたがえた幅ひろい濠とか道路をなかにはさんで、宮城（皇居）と対峙する位置を占めていた。

この宮城とGHQとのコントラストは、戦前と戦後の日本を象徴するもののようであった。戦前、宮城がおごそかに保持していたオールマイティは、戦後は濠ひとつを超えて、GHQに移っていた。

総司令部のオールマイティなるものは、衆議院事務局に入って、まだ三年に充たない須永にも、わずかな体験をおしてひしひしと感じとれた。

たとえば——一年前、さきの片山哲首相の社会・民主・国協連立内閣が、GHQ指令にもとづいて、経済力集中排除法案を、国会に提出した。

この法案は、総司令部が農地改革とならんで断行した財閥解体の事後対策であった。財閥にふたたび独占資本を形成させないためのものだった。日本の経済界は、まっとうから反対した。それをうけて、野党である吉田茂の自由党と、民主党の右派が、国会審議の過程で激しく抵抗した。

片山内閣は、「経済の集中を排除」という字句の上に、「過度の」という文字をかぶせることで、ようやく反対勢力を納得させ、衆議院を通過させた。

参議院では、保守勢力の反撃はいつそう激烈さを加えた。国会最終日の十二月九日、反対派の議事引き延ばしや妨害で、本会議の採決ができないまま、十日午前零時を迎えた。それで国会は幕切れて、集排法は審議未了の流産におわった。

このときすかさず、総司令部からの指令が政府、参議院当局に飛ばされてきた。「絶対に成立させよ」という至上命令であった。

与党も野党も合意の上で、参議院本会議場の時計の針を、十二月九日十二時前何分かに巻き戻して、この法案を成立させた。

「GHQは、沈んだ太陽まで呼び返す。アメリカ版の清盛だよ」と、ある議員がいった言葉が、須永の記憶のなかになまなましい。

たしかに総司令部は、二十年（一九四五年）十一月末、トルーマン米大統領が指示した日本管理政策を、その後、客観的な国際情勢の変化や、日本側の希望、意見で、ある部分を改変し、あ

る部分を加えはしたが、大部分を日本政府に指令して、その手で実行に移させた。

戦後初代の東久邇稔彦内閣から、幣原喜重郎、吉田茂、片山哲、芦田均内閣まで、約三年におよぶあいだ、どの政権も原則において、総司令部の指令や指示、示唆の枠外に出ることは許されなかった。

——といっても、これまではつぎの総理大臣、その政権のありかたについて指令してきたことはただの一度もなかった。その例からすれば、いまのケージスの言葉は指令ではなく単なる示唆、希望なのかも知れない。必ずしも承知する必要はなかったのではないか。それを、中井川がイエスと答えたのは、やはりGHQの權威を畏怖しているせいなのだろうか？

そう思いながら須永は、中井川にしたがって民政局次長室をあとにした。総司令部のロビーを戻り、リフトで一階に降りていくあいだ、あまりにも無造作に「イエス」と答えてことを済ませた中井川に、須永はつよい不満をいだかずにはいられなかった。あるいは自分の独断で、ケージスにその発言が指令か、示唆か、希望意見か、問いただすべきではなかったろうか、と考えた。ことが重大であるだけに、若い須永は思い悩んだ。といっても、衆議院事務局の下僚として、ただ通訳を命じられただけの彼である。中井川に、「その点を質問してはいかがです？」と、口をさしはさんだだけでも、自由党幹部で、衆議院運営委員会のボスである中井川は、「若僧の下僚が、差し出がましい」と、文句をつけたろう。

須永は、割り切れない不快感を胸のなかにしこらせながら、中井川とともに、待たせておいた

衆議院の車に乗りこんだ。昭和二十三年（一九四八年）十月七日のことである。

政治史の上からいえば——昭電事件の収賄容疑で、民主党の栗栖赳夫蔵相と、社会党の西尾末広國務相とがあいついで逮捕されて、芦田均の民主・社会・国協三党連立内閣が、総辭職を発表した約一時間あと、午前十一時を少し過ぎた時間であった。この日は、朝はやくから、肌さむい雨が降りしきっていた。

2

「占領軍は、冷厳なものだ。それを君も、自分の眼でみたじやろう」——中井川は須永にそういいおいて自由党本部で車を降りた。自由党本部は、その時代から平河町のいまの自民党とほぼ同じところに位置していた。ただ戦後三年余のそのころの本部は、見ばえのしない箱型の木造二階建であった。狭くて、記者クラブ用の部屋などなかった。

記者たちはいつも何人か、そうひろくない玄関におかれた長椅子のあたりに屯していた。その日、彼ら記者たちはみな、面に興奮をみながらせていた。芦田内閣総辭職という政変に遭遇したからだ。

政権が、野党第一党である自由党にまわることは常識として、その組閣方針について、総司令部から副幹事長の中井川に呼び出しがあったことを、記者たちも承知していた。

戻ってきた中井川を、彼らは待ちかねていたように、わっと取りかこんだ。

「どうでした?」

「お濠端の意向は?」

お濠端——記者たちも議員たちも、GHQをそう呼びならわしていた。やつぎ早やな、勢いこんだ記者たちの質問を、

「まあ、まあ、まあ」と、中井川はおおぎように手をひろげて抑えた。

「……それがだ。本来、極秘事項に属するんじやが、いづれあきらかにさせにやあならんことだ。私から出たというては困るが……」

と、もったいぶって間をおいた。

「お濠端は……だ、山崎猛君を首班に、挙国連立……そういうとるんだ」

どの記者も、凝然となった。総裁の吉田を首相にしない——とは、常識を超えた予想外のことだったからだ。

「なぜ、吉田ではまずいんです?」

そこに、質問が集中した。中井川は、オーバー気味に、深刻な表情をこしらえてみせた。

「……その理由を、わしにいわせなさんな。いやしくも現総裁のことだ。党幹部のわしの口から、よういえんではないか。それに賢明な諸君のことじゃから、およその察しはつくじやろう」

記者たちにも、総司令部民政局が、吉田を回避する理由は、中井川の註釈を聞かなくても、容

易に察知できた。

「吉田は、ウルトラ・コンサバティブ（超保守）」というわけですね」

「民政局のニュー・デイルーたちは吉田嫌いだ。社会党、民主党びいき……ですからね」

口々にそういつて、なお執拗に迫る記者たちを、中井川は手でかきわけた。

「さあ、さあ、党幹部がお待ちかねだ。報告して、対策を練らにやならない。君たちに、さきにいうてしまつて、順序が逆になりおつた」

さすがに政変の日だけあつて、党本部には在京議員たちの多くが詰めかけて、二階の大小二つの会議室から廊下にまで溢れていた。だれもが、いよいよ政権がくるという興奮と緊張の面もちで、それぞれがかわしている話し声も高かった。入閣の予想や政務次官の下馬評にまで話がおよんで、ところどころにぎやかな笑いが渦巻いた。

約一年半にわたる野党時代にはみられなかった活気が、本部のどの部屋にも充満していた。といつても、選挙区に戻っている議員も多く、その人たちが政変を聞き知って上京してくるまでは一兩日の時間を要するはずであった。もっとも速いニュースはNHKのラジオだけで、交通機関は航空機がなく、東京・大阪間11時間の列車がいちばん速い乗物でしかない時代である。

二階の奥まった役員室と、それにつづく幹事長室に馳けつけた役員は、数が少なかつた。その十人足らずの顔ぶれで、とりあえず政局收拾、組閣などこれからの運びを協議しなければならな